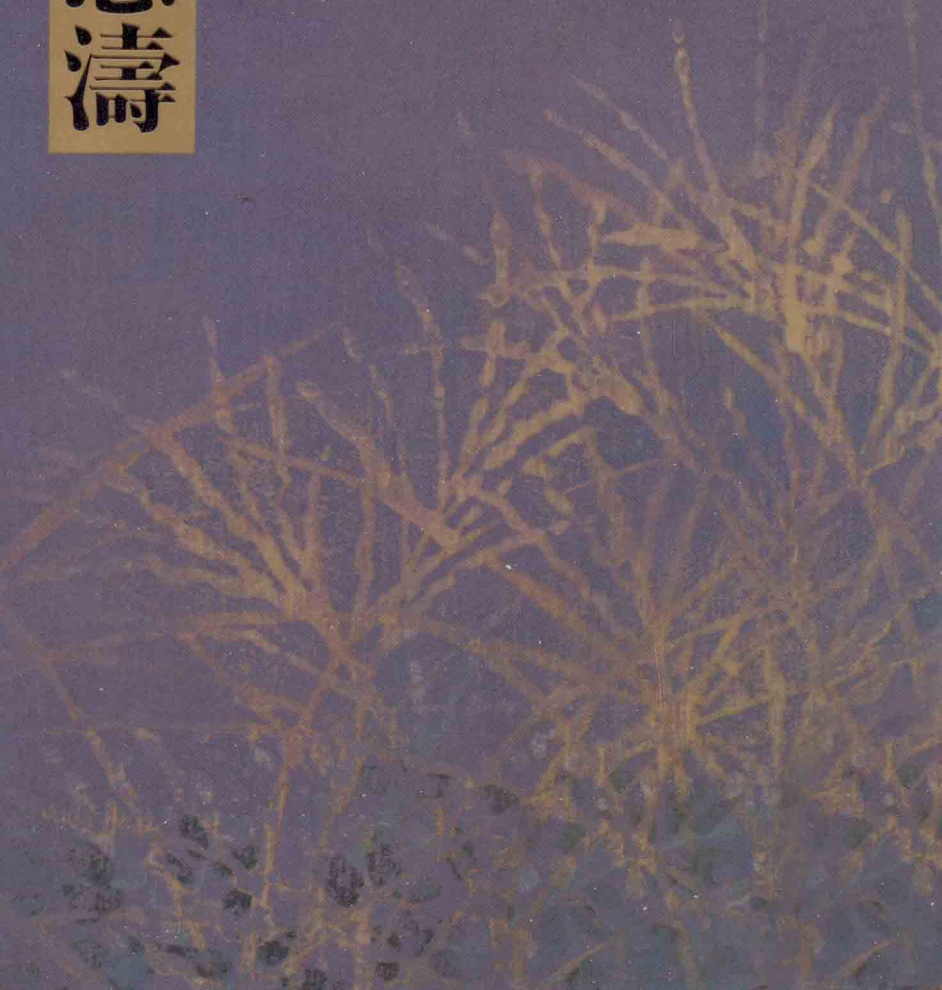


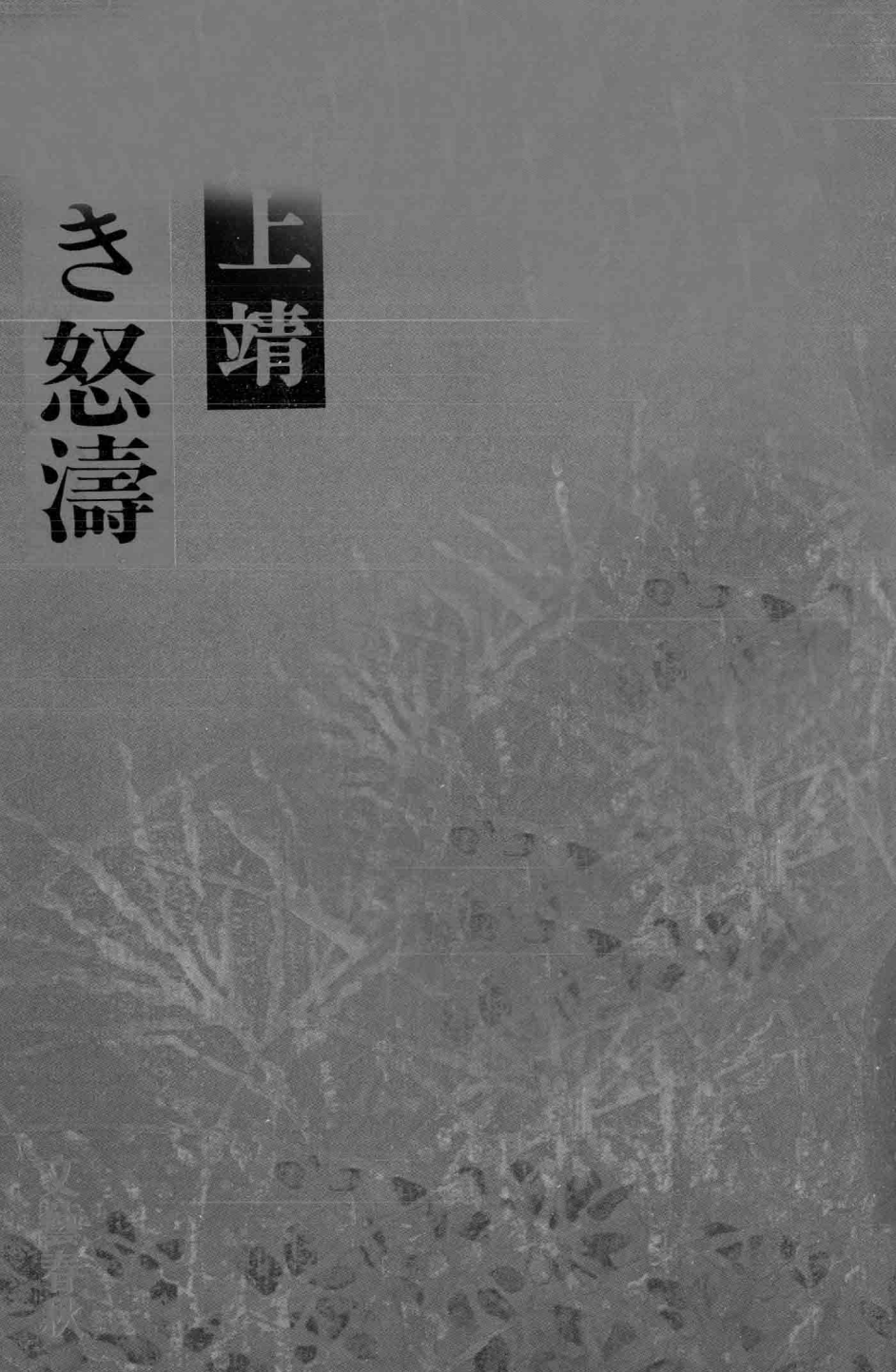
井上靖

若き怒濤



上靖

き怒濤



© Yasushi Inoue. 1977

若き怒濤

昭和五十二年六月二十五日 第一刷

900円

著者 井上靖

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社 文藝春秋

郵便番号 (102)

東京都千代田区紀尾井町三

電話 (〇三) 二六五—二二一

本文印刷 凸版印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

Printed in Japan

《長篇小説》

若き怒濤

内容目次

復讐	126
鶉飼	109
くちなし	104
諍い	91
夏服	78
潮風	63
宝石	50
メモ	34
使者	22
青葉	7

解説

福田宏年
243

水の面
221

新しい生活
204

月
191

秋立つ
177

結婚の条件
164

女の幸福
148

訪問者
138

若き怒濤

装
幀

平山郁夫

青 葉

長良藍子の乗った汽車が、東京駅へ着いたのは四時ちよつと過ぎであった。

藍子はホームへ降り立つと、動かないで、そこにそのまま立っていた。姉の多枝子が出迎えに出ていると思つたからである。

十分程そうしていたが、どうしたのか姉はどうとう姿を現わさなかつた。

姉のことを諦めると、藍子は足許に置いてあつた青色の鞆を取り上げ、いったん階段を降り、大森へ行く京浜電車のホームへと上がって行つた。

藍子は東京は初めてではなかつた。去年だけでも春秋に一度ずつ上京している。

だから姉の多枝子が下宿している大森へ行く道順はよく知っている。ただ今年になってから、同じ大森ではあるが、姉が宿所を変えていたので、なるべくなら迎えに出て貰いたいと思つて、そうした依頼の手紙を出しておいたのである。

電車を大森で降りると、駅前ゆるやかな坂道を登つた。

番地だけが違つているので、たいしたことはないと思つたが、それでも家を探すのに十分程かかつた。

百坪程の庭を持つ、思つたより小綺麗な中流どこの住宅であつた。洋館まがいの二階があり、それを一面に蔦の葉が瑞々しい青さで覆つていた。

藍子は門を入つた時、右手の台所の方に、中年の女性の姿が見えたので、その方に近づいて行つた。

「長良がこちらに御厄介になつておりませうか」

と、声をかけた。

「おや、お妹さんですの。今日いらっしゃるお話は聞い

ていましたが——」

四十五、六のこの家の女主人らしい人物は藍子を案内して、裏庭の方へ廻って行った。

母屋と一間程の間隔を置いて、小さい離れがあった。庭から部屋の内부는まる見えだった。雨戸が開けられてあるのはいいとして、硝子障子の一枚が半開きになっている。裏庭に建てられてある離れであるから、不用心ではないにしても、いかにも、姉らしいと思った。大方、朝寝坊して、会社の出勤に遅れまいと大周章でに周章で、出て行ったものであろう。

「姉はいつも何時頃に帰りますでしょうか？」

「さあ、遅い時も、早い時も」、

女主人は、そんな風に答えて、

「今日はあなたのお出でになることをご存じですから早くお帰りになりますよう」

そう言うと、彼女は母屋の方へ去っていった。

藍子は姉の部屋へ入った。机の上に便箋がひろげられているのが、直ぐ、眼についた。藍子は坐ったまま、それを覗いた。大きな文字が並んでいる。

（今日遅くなります。本箱の中にパンとバターがありま
す。先に寝込んでいてよろしい）

藍子は姉の居ない部屋に坐っていた。

本箱が二つ並んでいる。本箱といっても、書物の詰っているのは、床に近い方の一つだけである。しかも上の二段だけ。下の方の二段には外国の化粧瓶が、驚く程沢山並んでいる。

もう一つの本箱は、一番上段が、映画や芝居や音楽会のプログラム。二番目三番目の段はからっぽで、一番下の段には、珈琲の罐、珈琲茶碗、スプーン、それにウイスキーの小瓶、チョコレートの空箱、そんなものがごたごたと並べられてある。

そして置手紙に書いてあるように、なるほど、パンが三片程洋皿の上に置かれ、硝子のバター入れにバターが入っている。

藍子は、自分の下宿が見付かるまで、暫くの間、ここに姉の多枝子と同居するわけであるが、性格の違う姉との同居は、相当やり切れないこともあるだろうと思う。併し、藍子は、小さい時から、この姉が好きである。

父よりも、母よりも好きだと思つている。

ずばらなくせに、神経質なところもあり、わが儘な一方、誰にもないような親切なところもある。

藍子は小さい時から、三つ違いのこの姉によく弄められたが、それでいてやはり姉を慕つた。妙に心のやさしいところがあり、遠足のお弁当などいつも心のこもったものを作つてくれた。

藍子は、汽車で昼食を食べなかつたので空腹を感じていた。

本箱からパンとバターを取り出して、それを食べ、やはり本箱に入つていたオレンジ・ジュースを一本抜いた。硝子戸の外に、山吹の黄色い花が咲き盛っている。それが夕闇に吞まれて行くのを、藍子は初めて父母のもとを離れた感傷的な気持で眺めていた。

先に寝んでいるように置手紙には書いてあつたが、床に入る気にならなかつた。机の上の時計が十時をさし示したが、多枝子は帰つて来なかつた。

十一時近くなつて、戸外で自動車の停まる音がした。とそれから間もなく、中庭を踏んで来る聲音がした。

「藍ちゃん」

戸外から声がかかった。多枝子が入つて来た。

「まだ寝なかつたの」

「だって——」

「寝ていていいのよ」

先に寝ていなかったことを咎めだてするような多枝子の口振りだった。

暫く見ないうちに、多枝子は見違える程綺麗になつていた。藍子は、見惚れるように、姉の顔を見入つていたが、ふと、姉はお酒を飲んでいのではないかと思つた。顔がそんな赤さだった。

「藍ちゃん、もうわたしたち大人だから、一緒に住んでいても、お互いの生活は干渉しっこなしよ」

多枝子は帽子を脱ぐと、べたん畳の上に坐つて言つた。

「お酒飲んでますの？」

「藍子が訊くと、

「ぼっちりよ」

それから、

「御飯食べた？」

「パン戴いた」

「可哀そうね、東京第一夜がパンだけでは。でも、わたし仕方がなかった。明日の晩、歓迎会開くわよ」

多枝子は欠伸あくびをすると、握り拳で二つ三つそれを叩いて、

「寝ましよう」

と言った。

「母さんが——」

と、藍子が母からの言伝を伝えようとする時、

「いいの。今夜はやめて！ 明日ゆっくり聞いわ。ああ、眠たい！」

本当に多枝子は眠そうであった。

藍子は、姉を手伝って、押入れから二組の寝具を引っ張り出した。

二つ蒲団を敷くと、六畳の部屋はいっぱいになった。

藍子も、姉の言うなりに、今夜は何も喋らないで眠ることにした。併し、自分の勤め先のことぐらい一言や二言質問してくれてもよさそうだと思った。

何となく、姉の多枝子は人が違ったように、藍子には思えた。

床に入って、電燈を消したが、藍子は眠れなかった。三十分ぐらい経った頃、

「藍ちゃん」

と、低く、自分を呼ぶ多枝子の声が出た。

「藍ちゃん」

また低く呼んだ。

その呼び方が、何か異常な感じだった。

藍子は返事をしないで黙っていた。

すると、間もなく、床を出る多枝子の気配が感じられた。

やがて、部屋の隅の小さな机の上のスタンドの灯がともされた。

藍子は姉に返事をしなかったので、そら眠りを発見されぬように、夜具を顎のところまで引き上げて、眼をむっていた。

多枝子は暫く、机のところまで、何かごそごそやっているが、そのうちに静かになった。

藍子は、多枝子が何をしているか、眼を開けて、その方を見た。

多枝子は机に向ったまま、何もしていなかった。少し前屈みの姿勢で、じっと机にもたれていた。

藍子は、ふと、姉が泣いているのではないかと思った。気になって、

「姉さん！」

と声をかけた。

「何してるの」

暫く返事はなかったが、突然姉の口から洩れたものは、笑い声だった。低く、うつろな笑いだった。

「遺書書こうかと思ってた！」

やがて、多枝子は言った。

遺書という言葉が、突然、多枝子の口からとび出したので、藍子ははっとした。

「嘘よ。あなたを驚かせたの」

多枝子は、そう言い直したが、顔は藍子の方へ向けなかった。

藍子は信じなかった。姉は、本当に遺書を書こうとし

ていたのではないかという気がした。

「姉さん！」

藍子は言ったが、こんども多枝子はそのままの姿勢で、振り向かなかった。

「こっちを向いて！」

「何よ！」

「何でもいいから、こっちを向いて！」

藍子には、姉が泣いているように思われた。泣いているか、いないかを確かめてみたかった。

多枝子は、返事をしないで、依怙地にそのままの姿勢を守り続けていた。

藍子は寢床の上で起き上がった。

その気配を知ったのか、

「藍ちゃんって邪慳ね。小さい時から意地の悪いところがある！」

言うなり、多枝子はくるりと、藍子の方を振り向いた。

藍子が思っていた通り、多枝子の顔は涙で濡れていた。

「これでいいの？」

「泣いているのね」

「泣いててはいけない？」

「本当に、遺書書くつもりだったでしょう？」

「まさか」

多枝子は、蒼ざめた顔を、少し引き攀らせて否定した。

「じゃあ、どうして泣いているの？」

「人間、悲しければ泣くわよ」

「何が悲しいの？」

「あなたなんぞには、判らないこと」

「判っているわ。瀬川さんのことでしょ？」

ずばりと、藍子は言った。何か判らないが、瀬川幹男に關係がありそうな気がしたからだ。

「冗談言っちゃあ、いや！」

本当に、いやそうな顔をした。

「じゃあ、山尾さん？」

「莫迦ね」

「じゃあ——」

なおも、藍子が郷里の姉の男友達の名前を言い出そう

とすると、

「やめて！」

きつく言って、

「あなたなどには想像もつかぬ人のために泣いて上げたの。そして、その人のために、遺書を書いて上げようか

と思ったの。でも、やめた！ 死なないで、奥さんから

も、子供さんからも、その人を奪っちゃう！」

多枝子は、急に彼女を襲った興奮のために蒼ざめて叫んだ。

藍子が眼覚めたのは七時だった。

雨戸の隙間から、白い光線が幾すじもはいつている。

「姉さん、七時よ」

藍子は、姉の出勤が気になったので、隣で、こちらに

背を向けて眠っている多枝子の方へ声をかけた。

「今日は少し遅刻してもいいの」

多枝子は、眼覚めていたらしく直ぐ返事をした。

そして、くると寝返りを打ち、

「昨夜、驚いた？」

と言った。その顔には、昨夜の興奮の影は残っていない、持ち前の明るさが、屈託ない笑顔に現われていた。

「あれ、本当は嘘よ。演技！ うまいでしょう」

その言葉をそのまま信じるわけにはいかなかったが、あるいは、本当に昨夜のことは、お芝居であったかと思いたいほど、多枝子はけろりとしていた。

藍子が返事をしないでいると、多枝子は、

「信じないのね。じゃあ、もう一度やってみましょう

か！ 会社でやる一幕物のお稽古したの」

それから、蒲団を撥ねのけ、

「やるわよ」

「莫迦ね、およしなさいよ」

実際にやりかねなかつたので、藍子は姉をたしなめた。

多枝子は雨戸をくりながら、

「いいお天気よ」

と言って、大きい伸びをして、

「起きなさいよ。寝ぼすけ！ おうちと違って、自分で

動かないと、朝御飯できないわよ」

藍子も床を離れた。

二人で母屋の横手の水道のところへ行って洗面した。

「母屋の小母さん、さっぱりした人ね」

藍子が言うど、

「——でしょう。わたしが、そう仕込んだのよ。いっさい没交渉。何時に帰ろうが、帰るまいが、ちっともうるさくないわ。あなたも、田舎風に余りにこにこしては駄目よ。喋らないで、つんとしているの」

そんな姉の言い方が、藍子には可笑しかった。

半時間程かかって、二人は朝食の支度をした。多枝子が本箱の引出しから鶏卵を二個取り出した。

「手品みたいね」

「まだ出てくるわよ」

多枝子はその隣の引出しから、林檎を取り出して、ほらと、藍子の方へ投げて寄越した。

そんな姉の子供らしい仕種しじゆを見ると、藍子は、昨

夜の多枝子が信じられなかつた。その言葉のように、彼女は根も葉もない演技を自分に見せたのかも知れないと思つた。

多枝子が会社へ出勤するために、家を出て行ったのは十時であつた。多枝子は、有楽町に本社を持つM R果汁会社の宣伝課へ勤めていた。M R果汁会社というのは、

新聞に派手な広告をして、最近めきめき売り出している新興会社である。

藍子は一人になると、部屋を片付けにかかった。

神経質なくせに、投げやりなところのある多枝子の部屋は、若い女の部屋としては、かなり乱雑を極めている。一応掃くだけは、毎朝掃くらしいが、雑巾はかけていない。

本箱の上の、花瓶には、古い水が入っているし、小さい半間の床の間に積み重ねられてある洋服の箱と箱との間には、埃がつもっている。

「どこへも手をふれてはいやよ」

多枝子には、そう厳命されてあったが、几帳面な藍子の性格としては、ほうっておけなかった。

部屋は見違える程綺麗になった。硝子障子を開け、北側の窓も開け放つと、小さい箱のような部屋を、五月の風が流れた。

「長良さん、居ますか」

藍子が縁の下の空箱にはいつている姉の何足かの靴を磨いておこうと思つて、靴クリームとブラシのしまつて

ある場所を探している時だった。

男の声が聞えた。藍子が身を屈めていたせいか、彼女には、近寄つて来た若い男が驚く程長身に見えた。

「会社へ出かけました」

藍子は立ち上がつて答えた。

「会社へお電話したら、まだ見えないと言うので、今日はお休みかと思つて、こちらへ来てみたんです」

青年は弁解口調で言つた。色の浅黒いのと、緊まった頬の線が、彼を精悍に見せている。併し、話しながら藍子を見詰めている眼は、何となく柔和であつた。三十になつたかならない年配である。

「御用だったでしようか」

藍子は訊いてみた。

「いいえ、たいした用事ではないんですが」

「わたしで判ることなら伺つておきます」

青年はちよつと考えている風だったが、

「じゃあ、これを渡して戴きましようか」

と言つて、上着の内ポケットから、二つに折つた封書を取り出した。